Dr.ヘリオットの おかしな体験

ジェイムズ・ヘリオット
池澤夏樹・訳

All Things Wise

Dr.ヘリオットのおかしな体験

ジェイムズ・ヘリオット

池澤夏樹・訳

集英社

and Wonderful

ALL THINGS WISE AND WONDERFUL
by James Herriot
Copyright © 1976, 1977 by James Herriot
This edition Copyright © 1977 by St. Martin's Press
Japanese translation rights arranged
with David Higham Associates Ltd.
through Tuttle-Mori Agency Inc.

Dr.ヘリオットのおかしな体験
一九七八年一二月二五日第一刷発行
一九八二年一月一六日第三刷発行
著者 ジェイムズ・ヘリオット
訳者 池澤夏樹
編集 株式会社綜合社
〒101 東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話 (03) 233―3811
発行者 堀内末男
発行所 株式会社集英社
〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―10
電話 出版部 (03) 230―6241
販売部 (03) 230―6281
印刷所 大日本印刷株式会社

©1978 Shueisha
0397―776026―3041
落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価 一五〇〇円

AD・ブックデザイン・田名網敬一●イラストレーション・古川タク

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

Dr.ヘリオットのおかしな体験

毎日の暮しの忠実な仲間である
ぼくの犬
ヘクターとダンに

明るく美しいものすべて
　大小あらゆる動物たち
見事なすばらしいものすべて
　どれもこれも神様が作られた

セシル・フランシス・アレダザンダー
一八一八―一八九五

第一章

「走れ走れ！」と教練伍長はわめいた。「ほら、ぐずぐずするんじゃない！」彼は、あえぎあえぎ走るぼくたちの列のしんがりについて、楽々と伴走しながら号令をかけていた。

ぼくは列の中ほどで、ほかの連中と同じようにやっとの思いで足を動かしながら、あとどれだけ身体がもつだろうかと考えた。肋骨は苦痛にきしみ、足の筋肉は悲鳴をあげている。いったい何キロ走ったことだろう。

さきほど兵舎の外に整列した時にはこんなことになるとは思ってもいなかった。正規軍装着用ではなく、ふつうのセーターに軍服のズボンといういでたちでは、これほど苛酷な試練が待っていると予想するはずがない。それに、その小柄な伍長だって喋る時は陽気なロンドンなまりで、ぼくたちを兄弟とみなしているかに思われた。顔も親切そうに見えたのだ。

「さあ、いいかな」と彼は五十人の新米空軍兵にむかって笑顔で言った。「ちょっと公園まで走ることにしよう。おれについてこい。左むけ、左！　駆け足、はじめ！　ひだり、みぎ、ひだり、みぎ、ひだり、みぎ！」

そうして走りはじめたのはもうはるか昔のことのようで、ロンドンの街路をいつまでよろめきつづけても、公園などは影もかたちも見えない。

体調は申し分ないなんてとんでもない思いあがりだったんだ、という声が頭について離れなかった。田舎の獣医という商売では、しかもヨークシャーの高原地帯で開業していれば、運動不足になるおそれは絶対にない。いつもかけずりまわり、大きな動物ととっくみあい、遠い丘の辺の家畜小舎まで何キロも歩く毎日なのだ。頑丈でなければやれるはずがない。そうぼくは信じていた。

しかし今、別の思いが頭にうかんだ。ヘレンと結婚してからの何カ月かは正に極楽の暮しだった。彼女は料理がうますぎるし、ぼくはその芸術の実に忠実な信奉者だった。居間兼寝室の煖炉の前でのらくら過すくらいすばらしいことはない。腹筋が萎縮し、胸筋がすっかりたるんだ事実にぼくは目をつむってきた。そのむくいが今こそやってきたのだ。

「もうすぐだぞ」と伍長が後からはげましたが、力なく走

る一団からは何の声もあがらなかった。それまでに何度聞かされたかわからないせりふで、ぼくたちはもう絶対に信じるまいと心に決めていたのだ。

しかしこの時こそはその言葉は本当だったらしく、角を一つ曲るとずっと先に鉄の垣と木々が見えた。この安堵感は筆舌につくしがたい。公園の門をくぐるまではどうやら体力も続きそうだ——そうしたら休憩して煙草もすえるだろう。足はもうまったく動かなくなっていた。

枯れた葉をまだ何枚か残している木の枝の下をくぐったところで、ぼくたちは一心同体にぴたりと立ちどまった。ところが伍長はなおも手をふってせきたてる。

「まだまだ、さあ、トラックをまわるんだ！」そう彼はどなって、公園の中を一周する広い土の道を指さした。

ぼくたちはぽかんと彼を見た。まさか本気じゃあるまい！　抗議の声が怒濤のように湧きあがった。

「そんな馬鹿な、伍長……！」、「考えてもくださいよ、伍長さん……！」

だが小柄な伍長はもう笑っていなかった。「走るんだ！どんどん進め……いち、に、いち、に」

すすけたシャクナゲとくたびれた草にはさまれた黒い土の上をよろよろと進みながら、ぼくはまだ自分の身に起こった変化が信じられなかった。すべてはあまりに急だった。たった三日前にはぼくはダロビーにいたのだし、今でも心の半分はまだそこに、つまりヘレンのそばにいるような感じなのだ。そして残りの半分はタクシーの後の窓から朝の光を浴びて家々の瓦屋根のむこうへ遠ざかってゆく緑の丘をながめている。あるいは客車の通路に立ってイギリス南部の平坦な風景が後へ後へと流れるのを見て、だんだん重くなる気分をもてあましている。

ぼくはローズ・クリケット場ではじめて英国空軍の一員になった。たくさんの書類に記入をすませ、身体検査を終え、軍服その他の装備を山のように支給された。宿舎はセント・ジョンズ・ウッドのアパートの一つだった。家具やなにかを運び出してしまう前にはずいぶん贅沢なアパートだったはずだ。それでもさすがに浴室の設備までは重すぎて運び出せなかった。豪華なその浴室でちょっと栓をひねるとお湯が無限にほとばしるというのはなかなか嬉しいことだった。

忙しかった最初の日の終り、ぼくは緑色のタイルを貼った贅沢な小部屋へ逃げこんで、ヘレンがかばんに押しこんでくれた高級な化粧石鹸の泡をたっぷり身体にこすりつけた。しかしそれもその時かぎりで、二度とこの石鹸は使えなかった。匂いの作用はぼくに対してあまりに強烈で、その匂いをほんのちょっと嗅いだだけで、ぼくははじめて妻と別々に過した夜のつらさを思い出す。そのうつろな情ない気持はなかなか忘れることができなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二日目、ぼくたちはやたらに行進をし、講義を受け、食事を取り、予防注射をした。ぼくにとって注射器は毎日使う道具だったが、同僚の多くは見るのも恐いという顔をしていた。特に血液を採取する時がいけない。自分の静脈から黒っぽい液体が流れ出すのを見ただけで、若い男が気を失ない、音もなく椅子から床にすべりおちる。時には四人も五人もが続いて失神し、雑務兵が嬉しそうに笑いながらその身体を運び出した。

ロンドン動物園で取った食事は、奥の方から聞こえてくるサルのおしゃべりやライオンの咆哮のおかげでなかなか楽しかった。しかしその前後はただもう行進につぐ行進で、新しい長靴のため苦痛はいよいよひどかった。

三日目になってもぼくたちはまだ様子がのみこめなかった。最初の日同様その朝も六時というひどい時間に、ごみバケツの蓋を打ちならす音で起こされた。銀のラッパを使ってくれると期待していたわけではないが、それにしてもごみバケツの蓋というのは色気がないにもほどがある、とぼくは思った。そして今、長々と走らされたぼくの関心は、やっと公園を一周したというその事実だけにあった。門はもはやほんの数メートル前に迫り、ぼくはよろよろとその中へ走りこんで、うめき声をあげている仲間のあいだに足を止めた。

「諸君、もう一周だ！」と伍長がどなった。ぼくたちが唖然として見ると、なんと伍長はやさしく微笑していた。

「ひどいと思ってるだろ？　まあ初等訓練部隊に行ってから思い出してみろ。おれのしつけがいかにやさしいかわかるはずだ。いずれはおれに感謝するぞ。さあ、駆け足はじめ！　いち、に、いち、に！」

ふらつく身体をなんとか前に運びはじめた時、いやな予感がひらめいた。もう一周したらぼくは死ぬ——絶対確実に死んじまう。かわいい妻と幸福な家庭を後にして国王と祖国に奉仕しようと入隊したのに、こんな仕打ちを受けるとはあんまりだ。到底許せることじゃない。

その前の晩ぼくはダロビーの夢を見た。ぼくはデイキンさんの牛舎にいた。彼の辛抱強い柔和な目と長い顔、垂れた口ひげがしゃがみこんだぼくを見おろしていた。

「このブロッサムばあさんももうおしめえってわけかの」と彼は言って、年取った雌牛の背に片手をのせた。労働でふくれあがった大きな手だった。デイキンさんの骨格にはあまり肉がついていないが、節くれだった太い指を見れば彼が苦労を重ねてきたことはすぐわかる。

ぼくは針をふき、縫合用具やメスの入った金属の箱にほうりこんだ。「あなた次第ですよ、デイキンさん。だけどこの乳首を縫ってやるのもこれで三度目だし、同じことがまた起こるかと思うとね」

「ああ、そういうこったな」農夫は腰をかがめて、縫目のならんだ長さ十センチの傷あとを見た。「こんなひどいことになるとは思えんがの、たかがほかの雌牛が踏んだだけで」
「牛のひづめってのはずいぶん鋭いんですよ」とぼくは言った。「包丁が降ってくるようなもんだ」
年老いた雌牛で一番困るのがこれだった。乳房が垂れさがり、乳首は長くぶらさがるようになるので、牛が自分のかこいで横になると、泌乳器官は横に押されて、隣りの牛のかこいにはみだす。右のメイベルか左のバタカップか、どちらかの牛がそれを踏むことになる。
木でかこいを作り、床に小石を敷いたその屋根の低い牛舎には六頭の牛がいて、どれもが名前を持っていた。デイキンさんはたった六頭の乳牛とわずかの仔牛、豚、それにニワトリでやっと生活をささえているのだが、彼のように牛にちゃんと名前をつける農夫は最近では本当に珍しくなった。
「なんだな」と彼は言った。「言ってみればこいつはわしに鐚一文の借りもねえんだ。こいつが生れたのは十二年も前のこったが、わしはその晩のことをまだよく憶えとる。あのデイジーばあさんがこいつを生んで、わしはこれを空の袋にのせて、そうだ正にこのかこいだよ、ここから運び出した。えらく雪の降る晩でな。それ以来いったい何千リットルの牛乳を出してくれたかわしには見当もつかん。今でも一日十八リットルだ。そう、わしには鐚一文借りはないはずだ」
自分のことが話題になっているのを知っているかのように、ブロッサムは首をまわして彼の方を見た。年老いた牛の見本のような体形だ――飼主同様ほとんど肉がなく、腰骨がぐっとはり出し、足も角も大きくなりすぎて、彎曲した角は根元から先端まで環状のすじでおおわれている。身体の下には、かつてはたっぷりのあった乳房が、ほとんど床に触れんばかりに垂れている。
おとなしくて忍耐づよいという性格の点でも彼女は飼主によく似ていた。ぼくは縫合の前に乳房に局部麻酔をほどこしたが、そんなことをしなくても彼女はじっと我慢して動かなかったにちがいない。乳首の縫合の場合獣医は後足のすぐ前に頭をつっこむから、牛にすれば実に蹴っとばしやすいのだが、ブロッサムに関してはそんな危険はまったくない。一生で人を蹴ったことなど一度もない牛なのだ。
デイキンさんは頬をふくらませた。「どうにもならんな。売るほかあるめえ。ジャック・ドドソンを呼んで木曜の肉牛市に出してもらうとするか。ずいぶん固い肉だろうが、まあステーキの二、三枚にはなるかもしれん」
冗談めかしてそう言ってはいても、老いた牛を見る彼の顔は全然笑っていなかった。彼の後には、開いたドア越し

に、緑の丘と川が見え、浅く幅の広い川面には春の陽光を浴びて無数のさざ波が輝いていた。川辺の小石は日に褪せて白っぽく光り、谷間をおおう牧草が土手となって川と接するあたりでその緑と白の対照はいよいよいちじるしかった。

この小作地こそは住む場所として正に最高だとぼくはしばしば思った。グロビーの町からほんの二キロなのに喧噪とは無縁で、川と高原のながめは見るだけで心が踊る。ある時ぼくがこのことをデイキンさんに言うと、彼は苦笑した。

「きれいなながめも腹のたしにはならん」と彼は言った。

次の木曜日、ぼくがたまたまある雌牛の体内を「清掃」するためにデイキンさんの牛舎にいた時、家畜商のドドソンがブロッサムを引き取りにやってきた。彼はほかの農場をまわって一群のふとった去勢牛や雌牛を集めてきたところで、それらの牛は道のずっと上の方で、手伝いの男といっしょに、待っていた。

「さてさて、デイキンさんよ」と彼はとびこんでくるなり大声で言った。「おれの連れていく牛がどれかは一目でわかるぞ。ほら、そこにいるおいぼれだろうが」

そう言って彼はブロッサムを指さしたが、そのひどい言いかたのとおり、つややかなほかの牛にまじって立ったブロッサムは骨ばったおいぼれにちがいなかった。

デイキンさんはすぐには答えず、雌牛たちのあいだへ歩いていってブロッサムの頭をなでた。「そう、これだよ、ジャック」彼はしばらくためらっていたが、やがて牛の首に巻いた鎖をはずした。「さあ行きな」と彼は小声で言い、老いた牛はぐるっとまわってゆっくりとかこいから外へ出ていった。

「ほーれ、さっさと来い！」と家畜屋は叫び、牛の尻を手にした棒でつついた。

「乱暴はするな！」とデイキンさんが大きな声で言った。

ドドソンはびっくりして彼の顔を見た。「乱暴なんかしとらんよ。おれはただこいつを歩かせとるだけだ」

「わかっとるよ、ジャック。だがな、そいつに棒なんか使うことはない。おまえの言うとおりどこへでも行くからな」

その言葉のとおりブロッサムはゆっくりとドアをくぐり、デイキンさんがちょっと身振りで示すと、小道を歩きはじめた。

老農夫とぼくはならんで立って、雌牛が急ぐようすもなく丘を登り、その後からカーキ色の長いうわっぱりを着たジャック・ドドソンがぶらぶらとついてゆくさまを見まもった。道はやがてまばらにはえた木々のむこうへ曲っていて、人と牛の姿は見えなくなったが、それでもデイキンさんはそちらを見たまま、ポクポクと固い地面を踏むひづめ

の音を聞いていた。
それが聞こえなくなったところで、彼は急にぼくの方をふりむいた。
「さて、ヘリオットさんや、仕事を片づけてしまおうかの。わしが今お湯を持ってくる」
ぼくが腕を石鹸で洗って牛の体内に挿入するあいだ、彼は黙っていた。牛の後産を引き出すのは嫌な仕事だが、人がそれをするのをわきで見ているのはもっと嫌だ。ぼくはいつも牛の体内をひっかきまわす時には飼主とおしゃべりをすることに決めていた。しかし今回はそれもむずかしかった。ぼくが天気や、クリケットの試合や、ミルクの値段などについていろいろ話しかけても、デイキンさんは鼻を鳴らすばかりでまともには返事をしない。
牛の背によりかかってその尻尾をおさえながら、彼はぼんやりとした目つきでパイプをふかしていた。たいていの農夫は雌牛の清掃作業がはじまるとなにげなくパイプをくわえるものだ。それにこれはなかなかむずかしい仕事で、時にはずいぶん時間がかかる。胎盤がきれいに一度で取れることもあるのだが、この時はそれを一片ずつ杯状窩からはがしてやらなくてはならず、そのたびにこわばって痛む腕をお湯と石鹸で消毒するのも面倒だった。
遂にそれも終わった。ぼくはいくつかの子宮栓を押しこみ、前かけをはずし、シャツを脱いだ。会話はほとんど途絶え、牛舎のドアを開けた時には沈黙はほとんど耐えがたいほどだった。
デイキンさんはドアの取手に手をかけ、ふと耳をすました。「なんだ、あれは?」と小さな声で言った。
丘のどこからかポクポクという雌牛のひづめの音が聞こえてくる。この農場へ来る道は二本あるが、音がするのは広い方の道が街道と接するところの一キロほど先から入ってくる小道の方だった。ぼくたちが聞いていると一頭の雌牛が岩の露頭をまわって、こちらに走ってきた。
それはブロッサムだった。大きな乳房をゆすりながら、ぼくたちの後にある牛舎のドアめがけて、早足でやってくる。
「どういうこった、これは……?」とデイキンさんが大声をあげたが、老いた牛はぼくたちのわきをすりぬけ、さっさと牛舎の中に入り、長年過してきたかこいに収まった。ものほしそうに空のまぐさ入れを嗅ぎ、頭をめぐらして飼主をじっと見る。
デイキンさんも牛をじっと見た。風雨にさらされた顔には何の表情もうかんでいないが、彼のパイプからは煙がこきざみにパッパッと吐かれた。
いきなりおもてで重い長靴の音がして、息をきらしたジャック・ドドソンがドアから入ってきた。
「あ、そこにいたか、ばかったれが!」と彼はあえぎなが

ら言う。「もうみつからんかと思ったぞ」
彼は農夫の方をふりむいた。「いや、まったく、すんませんな、デイキンさん。あっちの道の入口んところから戻っちまったらしい。気がついたらおらんかった」
農夫は肩をすくめた。「いや、いいんだよ。あんたのせいじゃない。言わなかったわしも悪い」
「すぐに片のつくこった」と家畜商は笑って言い、ブロッサムの方へ寄った。「さあ、いい子だ、もう一辺そこから出てくるんだ」
しかしその時デイキンさんが彼を腕でさえぎった。
それから、びっくりして黙って見ているぼくとドドソンの前で、デイキンさんは長いあいだじっと雌牛を見つめていた。牛がしきりの朽ちた横木によりかかって立っている姿にはどこか悲壮な威厳があった。目は無欲と忍耐の色をたたえている。長いそりかえったひづめ、すっかり肉のおちた肋骨、床の小石をこすらんばかりにしている垂れた乳房、それらのみっともなさを補ってあまりある威厳だった。
そして、一言も口をきかないまま、デイキンさんはゆっくりとほかの牛のあいだをぬけてブロッサムのところへ行き、その首のまわりにカチリと鎖をかけた。それから牛舎のはじまで行き、フォークで乾草を一山持ってきて、彼女のかいば入れに正確にほうりこんだ。
これこそブロッサムが待っていたものだった。彼女は横木のあいだから首をのばして草をくわえ、満足そうに噛みはじめた。
「どういうこってすか、デイキンさん?」と家畜商はあきれかえって大声を出した。「みんなが市で待っとるというのに!」
農夫は半鼻にパイプをコンコンとあてて灰をすて、傷んだ小さな罐から黒い安物の煙草を出してつめた。「無駄足させてすまんがな、ジャック、こいつはここへ置いていってくれ」
「置いていけって……? だが……?」
「あんたは馬鹿かと思うだろうが、わしはそう決めた。家に戻ってきた以上、ここに置く」彼は議論の余地を残さずはっきりそう言いきった。
ドドソンは何度かうなずくと、すごすごと牛舎を出ていった。デイキンさんはその後を追っていって声をかけた。「手間かけさせた分は払うからな、ジャック。ちゃんとつけておいてくれ」
彼は戻ってきて、マッチをすり、パイプの上にかざして深く吸った。
「ヘリオットさんや」と彼は煙を目のあたりに漂わせながら言った。「ことがなるようになって、結局それが一番良いおさまりぐあいだってな思いをしたことはないかな?」
「ええ、ありますよ、デイキンさん。よくある」

「そう、さっきブロッサムが丘から降りてきた時わしはそう思った」彼は手をのばして牛の尻尾のつけねのところをかいた。「こいつはずっとわしの気に入りじゃったし、戻ってきたのをわしは喜んどる」
「しかし、その乳首はどうします？　そりゃ何回でも縫合はしてあげますが、それでも……」
「いやいや、ちょっと考えがあっての。さっきそいつの清掃をやっておる時気がついて、もう遅いと思ったんじゃが」
「どんな考えです？」
「そう」と老人は言ってパイプの中の煙草を親指でおさえた。「牛乳をしぼらんで仔牛を二、三頭こいつにあてがおうかと思うんじゃ。あっちの馬舎はあいとるし、あそこなら誰もこいつを踏んだりはせん」
ぼくは笑った。「そのとおりだ、デイキンさん。馬舎なら安全だし、三頭くらいの仔牛は充分育てられますよ。餌代くらいはかせぐってわけだ」
「いや、言ったじゃろ、それはもういいとな。何年も牛乳を出して、こいつは鐚一文わしに借りはない」柔和な微笑がしわだらけの顔にひろがった。「大事なのはな、これが家に帰ってきたということじゃよ」

公園をめぐる道をふらふらと走るぼくはもうほとんど目もあけていられず、たまにあけても赤い霧がかかったようでものがよく見えなかった。しかし、人間の身体がいかに無理がきくか、それは実に驚くべきもので、やがてすすけた木の枝のむこうにもう一度鉄の門が見えてきた時は、自分の目が信じられなかった。
かくて第二周でも死なずにすんだわけだが、もうすわって休むくらいでは全然足りない。地面に横にならなくてはだ。吐気がする。
「よくやった！」と伍長はとんでもなく陽気な声で言った。「みんな実によくやったぞ。それじゃこれからちょっと跳躍をしよう」
士気の一かけも残っていない疲労小隊はあわれなうめき声を洩らしたが、伍長の耳には入らなかった。
「さあ、両足をそろえて、その場で跳ぶ。それ！　それ！　それ！　いや、全然駄目だ、ちゃんと高く跳ぶんだ！　それ！　それ！」
でたらめにもほどがある。ぼくの胸はまるで苦痛の炎が燃えさかる煖炉だった。ぼくたちの身体をきたえるはずの連中が、ぼくの心臓と肺に取りかえしのつかない障害を与えようとしている。
「いずれはおれに感謝するぞ。おれを信じていればいいんだ。さあ、もっと高く跳べ。それ！　それ！」
苦痛のあい間に見ると、伍長はなんと笑っていた。この

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com